



橋本多佳子句集

註 〓 橋本美代子

北九州市立文学館文庫 ⑤



橋本多佳子句集

註 〓 橋本美代子

北九州市立文学館文庫 ⑤

目次

橋本多佳子句集

解説・評伝

凡例

一、本書は著者の全作品の中から三〇〇句を選び、脚註を付したものである。配列はおよそ年代順とし、制作年を付した。

一、句の表記は原典に拠り、振仮名は現代かなづかいで付した。

一、脚註は原則として現代かなづかいを用いた。

曇り来し昆布干場の野菊かな

昭和二年作

大正十四年七月、夫豊次郎と鉄道省主催の樺太・北海道旅行に参加、安別での作。ここで野菊を見ているが、北原白秋の「昆布干場」の歌の影響がある。白秋とはこの旅で同行、樺太旅行記の「フレップトリップ」にはH夫妻として記されている。

わが行けば露とびかかる葛の花

昭和三年作

九州小倉の櫓山荘での作。山の上の庭は黒船見張番所のあった所で玄海を一望、展望が利くが四方から葛の逞しい蔓が這い上ってくる。客なきときの山上はさびしく、時たまにしか行かぬため荒れぎみの庭である。

糶^{もみ}干^ほして天^{てん}平^{びよう}よりの旧^{きゆう}家^かかな

昭和六年作

「法陵寺村佐伯家」前書。半世紀前の句帳を開くと、ちゃんとの句が載っていた。昭和五年へかたよせて通されにけり糶むしろゝほか数句が見える。初期のこの作、本人の言葉をかりれば、おっとりしている。

公^く卿^げ若^{わか}し藤^{ふじ}に蹴^け鞠^{まり}をそらしける

昭和六年作

「春日神社蹴鞠祭」前書。昭和四年、大阪の帝塚山に住むようになつてから、中村直勝の文学散歩のサークルに加わっていた。幼かった私をよく連れ歩いていたので、この時の蹴鞠のぼこぼこという音に記憶がある。

硬^{かた}き角^{つの}あはせて男^お鹿^{じか}たたかへる

昭和九年作

この句の以前にも鹿の句は詠まれているが、山口誓子の選に叶った掲句が多佳子の最初の鹿の句と違ってよいだろう。「多佳子俳句の原型のやうに思はれる」と先生は解説されている。

花^{はな}葛^{くず}の濃^こきむらさきも簾^すをへだつ

昭和一〇年作

「檀山日記」。昭和四年大阪に移ってからは山荘として夏に来ていた。葛の紅紫の花が群がり咲く頃は、多佳子の二階の書齋に簾がかけられる。昭和七年へ青簾くらきをこのみ住ひけり〜を作り「花衣」創刊号で杉田久女の評を得たことがある。

ひぐらしや絨毯じゅうたん青あおく山やまに住すむ

昭和一〇年作

檜山莊。青い絨毯は来客のための部屋に敷かれていた。ひぐらしの啼く朝夕には、かつてのなつかしい日々がよみがえる。高浜虚子、杉田久女との出会いも山莊のこの部屋である。

波なみに乗のり陸くがの青あお山やまより高たかし

昭和一〇年作

「波」一連の句の中では、スピード感と構成の面白さがある。句帳には「波とあそぶ」と前書があり、波に乗れば沖ゆく船も吾に親しなどもならんでいる。まさか多佳子が波乗りをしたとは思えないが、父母が共に灰色の旧式水着で泳いでいるのを見た事は確かだ。

海^{うみ} 燕^{つばめ} 霧^{きり}
 の 停^{てい} 船^{せん} 夜^よ と な り ぬ

昭和十一年作

「サドル島沖にて」前書。昭和十年五月、上海・杭州方面へ旅する。『海燕』は、夫との最後の旅行となった上海行の途次、霧に停船している宮崎丸にあまたの燕が翼を休めたことが忘れ難く、それを句集名としたと、この句集の後記にある。

海^{かい} 図^ず あり こ も れ る 霧^{きり} に 燈^ひ を と も す

昭和十一年作

今ここに日満連絡船(シアトル丸)からの絵葉書がある。へ広島に寄港し二日ばかりで門司に着くといふスローモーションの船です。霧の停船を致しましたが、多佳子女史に傑作のある材料ですから萎縮して一句も出来ませんでした。下関にて 誓子(切手一錢五厘)

月光げつこうにいのち死しにゆくひとと寝ねる

昭和一二年作

長かつた看護りの終焉が刻々迫っている。この句の前にへ死に
 近き面おもに寄り月の光てるをいひぬゝがあり、悲しみを制し制して
 きた看護りの心は、充分にうけとめられる。九月三十日、月光
 の溢れる深夜夫逝く。

大阿蘇おおその波なみなす青野あおの夜よもあをき

昭和一三年作

阿蘇の広大な草原を大らかに捉えて爽快。阿蘇の句では昭和十
 一年へ火の山の阿蘇のあら野のちに火かけたるゝがあり、いづれも
 大景をうたつて負けぬ勢いが見える。

遠^{とお}花^{はな}火^び夜^よの髪^{かみ}梳^すきて長^{なが}崎^{さき}に

昭和一三年作

へ八月十八日、啓子、美代子を連れて阿蘇・雲仙・長崎へ小倉駅より出発。三等車へ句帳より。旅の宿で解いた母の髪の丈は背までであった。

櫛^{そり}の馭^{ぎよ}者^{しゃ}昂^{スバル}を帽^{ぼう}にかがやかす

昭和一四年作

「妙高原」。一月七日、山上のホテルに横づけされたのは、村人の曳く粗末な木箱の櫛だった。下山の途中暮れてきて母子別々の櫛のため心細かったが、この雪原の星の美しかったこと。

夕^{ゆう}焼^やくるかの雲^{くも}のもとひと待^またむ

昭和一五年作

「強羅」。十月七日へ誓子夫妻を訪ねるゝと句帳にあり、秋草の押花が挟まれている。山口波津女さんは「夕焼くるかの雲」のその雲を私達も山の上で見た。誓子もそれで「いなびかり宵に愛でたる雲立てり」といふ句を作ったと『海燕』鑑賞に記されている。

鴟^{もず}啼^なけりひとと在^ある時^{とき}かくて過^すぐ

昭和一五年作

十月十二日へ誓子・波津女・多佳子三人で語り愉しき夜なり——ひとの肩蟋蟀の声流れある——と句帳にあり。翌日、箱根を下山。この句をもって句集『海燕』は終っている。

雪^{ゆき}山^{やま}に野^のを界^{かき}られて西^{さい}行^{ぎよう}忌^き

昭和一六年作

五月の信濃は桃や桜が遅れ咲き、野の行手には飯綱・妙高・黒姫の山々が雪を頂いていた。まだ訪う人もない山里に西行を思う。

翁^{おきな}草^{ぐさ}野^のの枯^{かれ}色^{いろ}はしりぞかず

昭和一六年作

信濃の娘さんに翁草を教わった。一面の枯色の野にぽつんと咲く紫色の小さな花、それを護るように白い生毛が覆っている。この旅に次女國子同伴。

桜さくら 散ちるしなのの人の野の墓ばかよき

昭和一六年作

信濃は桜が散る季節である。行きずりの畑中に見た土地人の小さなお墓。その素朴さにひかれて自然について出た句境。

子こを負おへる子このみしなのの梨なしすもも

昭和一六年作

会う子会う子が皆背に弟や妹を括りつけて、ひきずるように子守をしているのが可愛くてならぬのである。あたりは梨やすももの花が咲いて明るい。

掌^てに熱^{あつ}き粥^{かゆ}の清^{すが}しさ夏^{なつ}やせて

昭和一六年作

もともとひ弱な体質で、殊に夏の暑さには弱く避暑もそんなところから始まった。瘦身に眼を窪ませて臥している姿をよく見かけたが、夏の日の熱い粥を手にして気分一新、句にさわやかな余韻を残している。

霧^{きり}降^ふれば霧^{きり}に炉^ろを焚^たきいのち護^もる

昭和一六年作

野尻・神山山荘八七番に六月から十月頃まで滞在。夏は若者達も出入りし多佳子を囲んで愉しげであったが、皆が去った秋は湖の霧が山荘をつつむ。多佳子は朝から身をまもるように炉を焚いていた。

十六夜はわが寝る刻を草に照る

昭和一六年作

へ大半の人が去った別荘地、暖炉で馬追がないていた。もう寝よう
と灯を消すと、外は十六夜で水底色に青かった。國子記。

ひとの子を濃霧にかへす吾亦紅

昭和一六年作

「日々手伝ひに来る子あり」前書。娘達より年下の大人しい少女
であった。一日の仕事了えて夕方濃霧の中へ帰すこのあどけ
ない女の子に対して、母親のような情を寄せている。吾亦紅は
好きな野花。へ霧の中おのが身細き吾亦紅へ

花^{はな}売^うりの擬^ぎ宝^{ほう}珠^{しゅ}ばかり信^{しな}濃^のをとめ

昭和一六年作

八月十八日へ声がしたので扉を開けると乳白色の霧の中に花売りの少女がいて、手甲をはめた手で花束を差し出した。擬宝珠のとき、さわききょうのとき、ほたる袋、吾亦紅なども國子記。

人^{ひと}去^さりしいなづまの夜^よぞ母^{はは}子^この夜^よ

昭和一六年作

八月三十一日へ富本憲吉氏をお招きして三時間余も話さる。面白し〜と句帳にある。お向いが富本さんのお家でよく遊びに来られ、月の湖にボートで漕ぎだすこともあった。

寂しければ雨降る露に燈を向くる

昭和一六年作

山莊の雨の夜。高台にあつたこの家は斜面に露が茂っていた。雨の日には寂しさがいっそう身に感じられる。さびしさに誘われるように傍の燈を雨の露に向けて。

月光に一つの椅子を置きかふる

昭和一六年作

「夫の忌日に」前書。へ九月三十日、月ことに麗し。夫逝きて四周の秋なり、湖面さやけし、月光に身ひとつ置く句帳より。

さびしさを日日のいのちぞ雁かりわたる

昭和一六年作

十月一日、夫の忌の翌日に雁の声を聞いてさびしさ深まる。へいのちが即ちさびしさであるやうなそんなさびしさの世界へそれを飛躍して「女ごころ」と言ってもいい。山口誓子『命終』の序より。

秋あきの蝶ちょうきりぎりしのもといそぎつつ

昭和一六年作

「北陸線親不知辺り」前書。へ越後の国、歌といふ宿より一振までの間の往還にて山の下と云。一方は嶮山にて其下の波打ぎはを往来す。(奥細道菅菰抄)

牡丹ほたんにあひはげしき木曾きその雨あめに逢あふ

昭和一七年作

「木曾馬籠、加藤かけい氏に御案内頂き、永昌寺に泊る。かけい氏は即日雨の中を帰へられた」前書。寺宛に大輪の見事な牡丹が咲いていた。へひとをかへすをだまきの雨止むまじく〜

燕つばめ 来きぬ 山やま家がの障しょう子じ真まっ白しろに

昭和一七年作

右と同じ旅中の句。障子の白さがこの山中に際立って印象強く思われた。季節ははや燕の来る頃というのに。

学まな
ぶ
子こ
に
暁あかつき
四よ
時じ
の
油あぶら
蟬せみ

昭和一七年作

「美代子入試のため暁よりはげむ」前書。帝塚山学院小学部から同女学部へ、何の苦勞もない受験勉強であつたが、亡き父の書齋が楽しく一人占めしていた。

硯すずり
洗あら
ふ
墨すみ
あ
を
あ
を
と
流なが
れ
け
り

昭和一七年作

神山山莊一八番に避暑。湖畔に近く数歩のところには泉が湧きつづけていた。七夕が楽しみで、硯を洗いにゆく。

わがひざに小猫こねこがぬくしいなびかり

昭和一七年作

ロツジの隣りにいた外人が小猫を飼っていたが、よく馴れて肩に乗りどこへでも伴をする。多佳子の膝の上にも載ってきた。いなびかりに帰ろうともせぬ小猫がほんのりと膝にあたたかい。

道みちの辺へに捨すて蚕この白しろさ信しなの濃の去さる

昭和一七年作

数カ月滞在した愛着の深いこの土地を去るに当って、道の辺に公然と捨てられている蚕を眼にした。この「白」が信濃を去る心に刻まれる。

山茶花さざんかのくれなるひとに訪とはれずに

昭和一八年作

誰に頼まれたのでもなく自らさらりと書いた短冊が、今手許に遺っている。愛着をもつ句だったのだろう。わが家の数少ない短冊の中の一枚。

母はは葬はふる
土つち美うつくし
や時しぐれ雨くれ降ふる

昭和一八年作

「八十二歳の母を郷土に葬る」前書。母、山谷津留は昭和十七年十一月七日永眠。東京で看護りの日を送り、母のいのちに逢ひ得たりと句帳に記している。浅草山谷堀近くの遍照院に葬る。津留はみだしなみのよい静かな人であった。へ武蔵野の樹々が真黄に母葬る

水^{みづ}打^うつてけふ紅^{こう}梅^{ばい}に夕^{ゆう}凍^いてず

昭和一八年作

帝塚山に住んでいた頃は、朝に夕に水を打ち庭はいつも清々しかった。山口誓子は「けふ紅梅に夕凍てず」の格調高いことを指摘され、「これは杉田久女から受継いだ格調で、この弟子はこの師を正しく継承したと言っている」と評された。

早^わ稲^せの香^かのしむばかりなる旅^{たび}の袖^{そで}

昭和一八年作

旅の袖にしむ早稲の香。ここちよき旅愁。「早稲の香」には土着の情がこめられる。芭蕉に「わせの香や分入右は有磯海」の句がある。「おくの細道」加賀の国に入る直前の句。

増^{ぞう}面^{めん}に八^{よう}日^かの月^{つき}の落^おちかか

昭和一八年作

「奈良二月堂に青衣女人の能を観る」前書。桜間道雄の「能面の話」に「女の部は、老女・姥、中年を現はした曲見・深井、ずっと若くなつて、増・小面・若女などがある」とある。増面に月が落ちかかる、で面の表情が変る。

つゆじもや発^たつ足^た袋^びしろくはきかふる

昭和一八年作

「四日市に誓子先生をお訪ひする」前書。足袋の白には日頃から気を配り、外出の折はお茶事に倣つて必ず一足余分に用意した。師を訪う敬虔な気持と早朝に出発する氣息が「つゆじも」を通して清々しい。へ濤うちし音返りゆく障子かな」

雪嶺を空にし人はあひわかる

昭和一九年作

「鈴鹿に堀内三郎を送る」前書。へうしろより肩かけうけてわかるる刻。学徒出陣で鈴鹿航空隊にいた青年を次女と共に送る。娘の許婚になるべき人だった。蒼空に鈴鹿の雪嶺がガラガラしていたと思ひ出を話してくれたが、彼はもどつては来なかつた。

古雛をみなのだぞいつくしき

昭和一九年作

「祖母の雛上野の戦火のがれて今も吾と在り」前書。祖母は慶応四年の彰義隊の戦いに会っている。母津留を背負つて逃げたという。多佳子は今、祖母や母が守つてきた古雛を通して「をみなのだ」を戦時下の桃の節句にしみじみと感じとつた。

鶯^{うぐいす} やかまどは焰^{ほのお}をしみなく

昭和一九年作

「住吉帝塚山より奈良西大寺の辺り菅原へ引移る。裏の松山へ登れば薬師寺の塔も見ゆ」前書。引越の荷は牛が曳いてきた。家は鼻が悶えるほど小さく思われた。それでも身近に鶯が啼き多佳子の焚く竈火は美しく息づいていた。

ほととぎす新墾^{にい}に火^ひを走^{はし}らす

昭和一九年作

奈良の生駒山はほととぎすの棲息地だと村人が言っていた。崖の上を啼きすぎてゆくその声は今も変らない。開墾で掘り出した竹の根に火を放つとパチパチよく燃えた。「火を走らす」に気魄が見える。

月つきいでてわが袖そでの辺へも臃おぼろなる

昭和一九年作

一生を着物で通した人であったが、戦時にはもんぺ姿も余儀なくされた。しかし開墾の一日が了るといつの間にかさりと着物に着かえて寛ぎを大切にした。臃にふと袖の辺を意識し身を愛しむ多佳子。

干ほし大だい根こん月つきかげにあり我家わがやなり

昭和一九年作

畠作りが上手になつて、蒔やトマトや茄子など多佳子の手で収穫されたが、中でも大根は春播き夏播きとわが家にいつも豊かになつて、それを干し冬に備えたりした。月かげに列ぶ大根に、これがわが家なのだと思う戦時下の感。

礫^{つぶて}うつ氷沼^{ぬま}のひびきを愛^{かな}しみて

昭和二〇年作

寒に入ると家近くの沼（蛙股池）は一面に凍りつき、通りがかりに小石を投げるとルルルと小鳥のような美しい音色を出す、それが楽しくて皆でよく投げて遊んだ。西垣脩さんと並んで投げあったこともある。

みどり子^こもその母^{はは}も寝^ねて雁^{かり}の夜^{よる}

昭和二〇年作

「啓子男子をあげる」前書。九月、焼野の東京から菅原の里に帰っていた三女が男子を出産（寛路）、産湯は多佳子が手際よくつかわせた。大きな元気なその子はすやすや眠り、やがて娘も眠りについたので見届けて、ほっとした安らぎの秋の夜。

貨車^{かしゃ}とまる 駅^{えき}にあらざる 霜^{しも}の崖^{がけ}

昭和二〇年作

「貨車の旅」前書。戦争が終り、九州大分農園の（農地改革）始末に次女と出発。聞切符も手にし安心していたが駅に配されてきたのは貨車であった。「乗る？」「うん」案外決断は早い。ようやく長旅が明けてゴットンと止ったと思つたら駅ならぬ霜の崖であった。

春^{しゅん}潮^{ちよう}に 指^{ゆび}をぬらして 人^{ひと} 巾^{とむら} ふ

昭和二一年作

「杉田久女様御逝去を知る。小倉在住当時俳句の手ほどきを受ける。毎日のやうに櫓山荘を訪づれられしを想ひ」前書。再び九州へ出かけ廃園となつている櫓山荘に立ち寄る。久女と散策した頃の句にへ裏門の石段しづむ秋の潮へがあり、思い出の海辺である。

花栗の伐らるる音を身にし立つ

昭和二二年作

「わが園芸場の栗畑伐りて畠とさる」前書。夫豊次郎が夢をかけて設計した果樹園であった。伐られてゆく花栗の香を浴びつつ園の女あるじとしての、こもごもの思いが「身にし立つ」にこめられている。へ生々と切株にはふ雲の峰へ

七夕や髪ぬれしまま人に逢ふ

昭和二二年作

「七夕や」は、恋し合う二星が年に一度だけ許されて逢うあわれ深い伝説を背景にもつ。「髪ぬれしまま人に逢ふ」がひとときわなまめかしいのはそのためだ。天の川の川波に濡れる女の髪と、地上で今「人」に逢う女の髪と。大岡信（「折々のうた」）より。

梶かじの葉はの文も字じ瑞みず々みずと書かかれけり

昭和二二年作

梶の葉は梶の木の葉で古くは七夕に七枚の梶の葉に詩歌を書いて織女星を祭つたと言う。「瑞々と書かれけり」に多佳子の気持ちが出ている。

夕ゆう焼やけ中なかとものにをみなのかみかみそまり

昭和二二年作

「山口波津女夫人に」前書。戦後はじめて伊勢天ヶ須賀海岸に山口誓子先生を訪う。戦争のつらかった日を経て再会した夫人と、女同士の共通のやすらぎのようなものが女の髪を通して感じられる。

母^はと子^このトランプ^{きつね}狐^な啼^よく夜^{なり}

昭和二十二年作

へ——燈火管制の光の下で私達親子はよくトランプをしました。
初めて住む田舎の闇は深く、聞き慣れぬ獣の声が聞こえますと、
それを狐の声と思ひ身を寄せあつたこともありました——自
句自解より。

霧^{きり}月^{つき}夜^よ狐^{きつね}が あ そ ぶ 光^{ひかり}の み

昭和二十二年作

十一月二十二日付の句帳には狐の句が二十数句記されている。
下句はへ尾をかへし〜になっている。狐は幼い時間いた祖母の
話に端を發し憑かれたように句に、随筆に出てくる。現実の狐
がとうとう裏山に現れたのだからイメージは尽きない。

凍いて蝶ちように指ゆびふるるまでちかづきぬ

昭和二二年作

句集『紅絲』はこの句をもつて始まる。戦後のザラ紙の句帳には一月十六日、へ凍蝶に潮さすごとく日射し来るへほか数句が記されている。『紅絲』は年代を問わず一冊が多佳子曼陀羅を描くかのように編まれているが、今回は企画に従った。

落ふきの臺とう寒かのむらさき切りききざむ

昭和二二年作

北庭に一月ごろ落の臺が顔を出す。それを待ちきれずに摘みとってくる多佳子。やがてトントントンと落の臺をきざむ音がひびいてくる。句帳にはへ落の臺むらさき得たりへと書きこまれている。

野のの鹿しかも修しゅ二に会えの鐘かねの圈わの中なかに

昭和二二年作

三月十二日へ二月堂修二会に参籠、導師北河原公典氏に中正院にて朝食を頂戴すゝと句帳にある。和やかな刻を得たのだろう。野の鹿も吾もともに修二会の鐘の圈の中というところが伝わる。

つまづきて修しゅ二に会えの闇やみを手てにつかむ

昭和二二年作

くるぶし弱く常からよく転ぶ。しかしあまり傷もしないで、おかしくてならぬように「あらあらあら」と笑っている。転んでも修二会の闇、ただではすまさない多佳子である。

寒^{かん}念^ね仏^{ぶつ}ひびくやひびきくるもの佳^よし

昭和二三年作

「かんねぶつひびくやひびきくるものよし」の一行詩自体が鉦の音のように響いてくる。「ひびきくるもの」とは念仏や鉦の音のみではないだろう。遠くから多佳子の胸に訴えてくるものに力を得て佳しと享受している。

掌^てに 裏^{つつ}む 光^{こう}悦^{えつ}茶^{じゃ}碗^{わん} 閑^{こがらし} 堪^たへ

昭和二三年作

堺の宇野家で石州流家元の本庄氏に茶事を習っていた。楽の光悦茶碗は戦の世を通して荒ぶ心のなぐさめであった。木枯が雨戸をたたたく菅原の庵にも光悦茶碗は風格を失なわなかった。

炎^{えん} 天^{てん} の 梯^{はし} 子^こ 昏^{くら} き にか つ ぎ 入^い る

昭和二三年作

八月、奈良の日吉館句会の二次会が春日野の古屋ひでを宅（鶴の茶屋）で開かれ、その折の作品。メンバーは西東三鬼、平畑静塔、右城暮石他天狼同人の面々で、三鬼に「これが天狼だ」と賞められたという。

蟻^{あり} 地^じ 獄^{ごく} 孤^こ 独^{どく} 地^じ 獄^{ごく} の つ づ き け り

昭和二三年作

「孤独地獄」の言葉が先に出来ていたが、なかなか纏まらなくて九月に入つてようやく「蟻地獄」に定置。芥川龍之介に「孤独地獄」の小説があるが、この言葉を身をもって感じていたのかもしれない。句帳に「臥床の日多し、少し痩せたることし」とある。

木^ほ瓜^け紅^{あか}く田^い舎^{なか}の午^ご後^ごのつづくなる

昭和二三年作

〔四月十二日、三度豆を植える、じゃがいも一畝発芽、肥ひとつ通りすむ。同十八日、木瓜紅く田舎の午後のつづくなる、同二十五日、木瓜紅く吾子と離るる日のはじまる（次女東京へ）句帳より。〕

木^きの实^み独^ご楽^まひとつおろかに背^せが高^{たか}き

昭和二三年作

近所の少年がよく遊びに来る。この日は木の实独楽を作り、まわして見せてくれた。団栗はみな似ているが椎の実や榎の実が混っていたかもしれない。

いなびかり
北きたよりすれば北きたをみ見る

昭和二三年作

八月二十九日夕、いなびかり激しくて作る。菅原の家は南に崖を負い稲光は広い北窓から射しこんで来た。「北」は好みの方位で句帳の至るところに見受けられる。多佳子の代表句の一つ。
西大寺境内に句碑立つ。

薔ば薇ら色いろの雲くもの峰みねより郵ゆう便びん夫ふ

昭和二三年作

奈良の富雄あたりを歩いていたとき、北空一杯に積乱雲がたち茜色に染まって見事であった。親子で立ちどまって眺めたが、かの日のことが鮮明によみがえってくる。村には郵便屋さんか午後の配達に廻っていた。

燦々^{さんさん}をとめ頭^ず上に枇杷^{びわ}すすする

昭和二三年作

「我等の結婚を記念して九州別府市外高城丘陵を開墾して二十年、果樹漸く茂りし頃夫の死にあひ女手に煩はしきこと多く漸次衰退に向ふとき戦争となる。終戦後、農地改革のため全農地買上げの運命に会ふ。／略」前書。へ枇杷を吸ふをとめまぶしき顔をする」

流^{りゅう}燈^{とう}を灯^{とも}して抱^{いだ}くかりそめに

昭和二三年作

「榎本冬一郎氏に誘はれて、その故郷紀州田辺に流燈を見る」前書。八月十日、へ近村の人々精霊に捧げし燈籠を集め波打際に焚く、焰炎々と幾ヶ所にもあがり、夜更くるまで続く。一焰の中蓮燈籠の燃ゆるなり一海女の家に泊めてもらう句帳より。

凍いて蝶ちようのきりきりのぼる虚空こくうかな

昭和二三年作

十二月二日、一凍蝶や悲しき日記つづくなりーと句帳にあり掲句が記されている。この頃親しき人の死に幾度か遇い胸中の悲しみが句になる。へ凍蝶も記憶の蝶も翅を欠きも同じ日の作。

肩かたかけの裡うちに息いきして人の死しへ

昭和二三年作

「夫の兄料左衛門逝く、夫歿後何くれとなく暖き手をのべられしを思ひ悲しさに堪へず」前書。黒の天鷲絨の肩かけに深々と顔をうめるようにして出かける姿を記憶している。へ刈田の火赤し人亡しと思ふとき」

金 色 の 焚 火 一 炷 二 人 の 死

昭和二三年作

「家近き沼に死にし男女を悼みて」前書。当日何も知らずに夕方沼を通つて帰つてきた母と私、大いに驚く。母は私に行くなと止め村の沼守の松蔵さんと現場の橋のたもとまで再び出かけて行つた。へ凍て死にし髪吾と同じ女の髪」

雪 窪 に 雪 降 る 愛 を 子 の 上 に

昭和二三年作

多佳子の句には、回想をあたためつつ作られたもの多いことを今回二十年振りに句帳を開いて解ってきた。今まで句帳を開くにしのびなかつたのである。この句も昭和十四年に赤倉の雪原を親子で下つた時の印象が源になっている。下句「愛を惜しみなく」を推敲。

師しの前まえにたかぶりゐるや冬ふゆの濤なみ

昭和二三年作

「鼓ヶ浦」。十一月十七日、山口誓子先生をお訪ねし、師の家に二泊もしている。句帳には冬濤の句五十を越す。へゆらゆらと月のぼるとき師と立てるへうち伏して冬濤を聴く擁るる如く

河豚ふぐの血ちのしばし流りゅう水すいにまじらざる

昭和二三年作

「九州路」。へ——市場の男は私の前でさつと河豚を開き臓を出し水洗ひをしました。冷たく透きとほった水に、河豚の血は糸をひいて流れますが、それも暫くで、やがて血の糸は先の方から解けてゆきました。へ自句自解より。

暮ひきいでて女おんなあるじに見まみえけり

昭和二三年作

この暮は一人暮しの多佳子の前に現われた。暮はまた菅原の家を訪ねられた西東三鬼の前にも現われている。へばくと蚊を呑む暮お嬢さんの留守 三鬼

螢ほたる籠かご昏くらければ揺ゆり炎もえたたす

昭和二三年作

戦後初めて京都で螢籠を見つけて買って帰りました。一夜二夜は美しく燦いてゐましたが、追々光が乏しくなりましたので、私はそれを幾度もゆり動かして炎えたたせました。ともすれば消え入りそうになる己の心の火をゆすぶるように、自句自解より。

麦刈が立ちて遠山恋ひにけり

昭和二三年作

へ——カール・ブツセの詩よりはるかに淡い。言葉としては淡いが、そこに実在する麦刈（この場合はおのづから手甲脚絆の乙女を想像するだろう）を見ると、そこにはそこはかと豊かな生命感が溢れて来る。健康的な汗のにおいが——飯田龍太（「奈良浄土」）

麦束をよべの処女のごとく抱く

昭和二三年作

同じとき。作業中の農夫が麦束を抱くその抱き振りを「よべの処女のごとく抱く」と見た。農村風流譚を彷彿させる。

恋猫のかへる野の星沼の星

昭和二三年作

愛猫の初恋路。夜おそくなつても帰らず心配で沼の辺りまで名を呼びながら探しに出た。思いがけないつぶらな星の夜との出会いだつた。多佳子は句を得、猫は恋足りてもどる。同年にへいなづまの野より帰りし猫を抱くゝがある。

更衣水にうつりていそぎつつ

昭和二三年作

句帳にはへ更衣にはふ切なし人のいのちと記されている。
——生きることにまこころ急き——の心境が働いているようだ。

蛇へびいでてすぐに女人にょにんに会あひにけり

昭和二三年作

「唐招提寺」。西の京にある唐招提寺は吾家からそう遠くない。田畑の道をゆくと寺の裏門に至るが、この辺りは蛇の棲家である。句帳には三月二十六日へ蛇を見し身のときめきのしづまらぬを筆頭に飽くことなく蛇の句がつづいている。

吾われ去さればみほとけ仏ほとけの前まえ蛇へび遊あそぶ

昭和二三年作

女人吾去り、蛇はみ仏の前で普遍の愛をむさぼり遊んでいるのである。ところがこの句に並んでへ寺男が来て甃の床を踏みならし蛇を追ひ払ってしまふと句帳に走り書きしている。

日ひを射いよと草くさ矢やもつ子こをそそのかす

昭和二三年作

唐招提寺。九月十六日作。へ山の子が没日の的へ草矢射るゝなど
数句句帳に記している。夕までよくも唐招提寺であそんだもの
だ。ゝあんたたち、矢を射るのうまいわね、もつと射ってみせて
頂戴とと言いつていたにちがいない。

一いっ燈とうな
く唐とう招しょう提だい寺じ月げつ明めいに

昭和二三年作

へ十三夜の月明に来ること叶ひし幸を思ふ。女の身にては夜の外出のむつかしさあれど、堀内小花氏(薫)の好意にて安々叶ひしことを感謝。同行清子、季子ゝ句帳より。へ月光に朱うばはれず柱立つゝゝ

月^{げつ} 天^{てん} へ 塔^{とう} は 裳^も 階^{こし} を か さ ね ゆ く

昭和二三年作

「薬師寺」。同じく十三夜。まだ西塔がなく、天平の東塔のみが建っていた頃の薬師寺である。三重の塔だが六層をおもわせ、裳階のリズミカルな美を月明の宙に組み上げている。

袋^{ふくろ} 角^{づの} 鬱^{うつ} 々^{うっ} と 枝^え を 岐^{わか} ち を り

昭和二三年作

「鹿」。一連の中の句。神田秀夫は、「鹿苑林に於ける多佳子」(「七曜」昭24・7)の中でへ——「鬱々と枝^えを岐^{わか}ちをり」など読んでいると、こっちの口の口の中に親不知が生えやしないかと思ふ程、生命を内側から描いて迫力をもつてゐる——と評されている。

雄^お鹿^{じか}の前^{まえ}吾^{われ}もあ^あら^らし^しき^き息^{いき}す

昭和二三年作

同じく、「秋は」と前書。十一月六日、春日野で出会った雄鹿のたかぶりを前にして。句帳には一気に書いたようでも文字までもあ^あら^らし^しい。つづいてへ息あ^あら^らき雄鹿が立^たつは切^きな^なけ^けれ^れが^が見^みえ^える。

夫^{つま}恋^こへば吾^{われ}に死^しねよと青^{あお}葉^ば木^ず菟^く

昭和二三年作

夫との思い出深い九州の櫓山荘では青葉木菟がよく啼いていた。そして菅原で一人きりの夜に青葉木菟の声を聞く。へただ一度だけ真似せし吾に青葉木菟啼く〜と句帳にある。

雉^き啼^なくや胸^{むね}ふかきより息^{いき}一^{ひと}筋^{すじ}

昭和二三年作

「伊地知清、重態の報来る」前書。在京中、身を寄せていた次女の家の庭深く雉が棲みその声を聞いて。当時、茂吉の「あらたま」を読んでいたから、雉と悲しみの関連に潜在的に茂吉の歌の影響をうけているかもしれない。

足^{あし}濡^ぬれてゐれば悲^{かな}しき桜^{さくら}かな

昭和二三年作

「上京して」。この句の前に「夜の雨方朶の花に滲みとほる」がある。花の雨に旅の足許をぬらしたのだろうか、この句に付す言葉はなく、娘としてもっとも多佳子の女身を感じとるのみ。

寝冷子の大きな瞳に見送られ

昭和二三年作

「父逝きし洋子よ博よ」前書。祖母としての心情が生に伝わって来る。しばらく共に居て遊び相手となっていた多佳子も病の子を置いて奈良の吾家へ帰る刻が来て後髪ひかれる思い。

ひと死して小説了る炉の胡桃

昭和二三年作

その頃何の小説を読んでいたのか、句帳にはへ小説が了り仔猫の鼻かわかずなど記され、知るは猫のみである。達観した詠みぶりが面白い。

人^{ひと}来^{きた}るひとり 蜈蚣^{むかで}を 押^{おさ}へるれば

昭和二三年作

崖下の菅原の家にはよく蜈蚣が現われる。みつければ咄嗟にそこらにある火箸か何かを掴んでむかでを必殺しようと懸命である。女一人でとり乱しているところ、そんな時に限って客が訪ねてくるのである。

箸^{はし}とるときはたとひとりや雪^{ゆき}ふり来る

昭和二四年作

雪ふるしずけさの中でひとり箸をとる時ほどさびしさを感じる時はない。雪は遠い昔の思い出を呼び覚ましたかもしれない。かつて帝塚山時代には十人余の食卓をきりもっていた多佳子であった。

雪^{ゆき}はげし抱^だかれて息^{いき}のつまりしこと

昭和二四年作

「天狼」創刊から一年、句も充実し、家にも人が多く出入りするようになったが、その反面相談相手も無く、孤独感は募っていたようだ。句帳には「夫あれば」「多佳子頑張れ」の言葉が見え、眠れぬ夜もつづいていた。夫回想の句の多いことを句帳によつて知る。

かじかみて脚^{あし}抱^だき寝^ねるか毛^けもの等^らも

昭和二四年作

凍夜ねむられぬ夜がつづいた。寒くて足を思わず抱き寝するそんな夜に、けものたちはいかにと、春日野で見た鹿にもわが身と同様に思いを馳せる。

雀^{むじ}
りたる
一^{いち}羽^わの
羽^う毛^{もう}
寒^{かん}月^{げつ}
下^か

昭和二四年作

―殺す雞決まる―とぼつんと書かれた句帳の文字。寒月下に一羽分の羽毛の鮮やかな描写が哀れだ。

寒^{かん}月^{げつ}
に
焚^{たき}火^び
ひとひらづつ
のぼる

昭和二四年作

雞をしめた夜の焚火。「ひとひらづつ」に多佳子の祈りがある。

雞とりと
 猫ねこ
 雪ゆき
 ふる
 夕ゆう
 べ
 食た
 べ
 足た
 り
 て

昭和二四年作

雞はプリマス、ロックにレグホンの黒雞、合せて五、六羽いた
 るうか、猫と雞、彼らは恰幅がよく、あるじ顔をし、人間だけ
 が乏しい糧に細々と暮らしていた雪の夕。

燃も
 ゆ
 る
 薪まき
 雪ゆき
 に
 置お
 かれ
 て
 焰ほのお
 立た
 っ

昭和二四年作

竈に薪を焚きつけるのは得意であった。御飯をたくとき、火力
 を落とすのに燃えている薪を抜きとつて火を調節する。薪は雪
 の上に置いて自然に消えるまで放置した。

威おどし銃じゆうおどろきたるは吾われのみか

昭和二四年作

奈良に来てすでに五年、それでもまだ驚かされること、馴れぬことの連続である。威し銃もその一つ。稲雀ならず作者のみがおどろいているようだ。

童どう女じよ童どう子じ来きてすぐ枯かれし崖がけのぼる

昭和二四年作

「久々にて洋子、博来る。父亡き後も健かに成長せしを喜びて」前書。家の崖が一番気に入つてよく攀じ上つた。そんな子供たちの元気さをよろこび見守る祖母多佳子。へ童女走り春星のみな走りゐる」

ラジオ大きく枯山かれやまのふもとに住すむ

昭和二四年作

娯楽は帝塚山から持ってきたラジオのみ。枯山を負う静けさに、時にはジャズも大きく鳴らし、どこことなく元気の無い多佳子に私はダンスを教えたこともある。

星ほし空ぞらへ店みせより林檎りんごあふれをり

昭和二四年作

九州での旅吟。―店先の林檎星空を知っている―と散文的な言葉が句帳に走り書きされている。星の研究家野尻抱影氏は、この句からゴッホの「夜のカフェ」を連想された。

河豚の臓喰べたる犬が海を見る

昭和二四年作

同じく九州の旅。河豚をごちそうになった後、その毒の臓腑を食べている犬を見てあわれに感じた。海辺の見たままの景であろうが、下句に緊張感が伝わってくる。

がうがうと七星倒る野火の上

昭和二四年作

奈良の飛火野あたりであろう。日吉館の句会に備えて散策中偶然出会った野火のたまわりもの、七星の傾きが豪快なタッチで捉えられている。

初蝶はつちように合掌がっしょうのみてほぐるるばかり

昭和二四年作

「東大寺、法華堂・月光菩薩」。多佳子の恋仏の一つ。月光菩薩は白い合掌の御手を少しずらしておられ、やわらかな白土質の仏身とよく調和している。早春の光の中を来る初蝶に思わず綻びんばかりの御手の表情はまことに美しい。

仏母ぶつたりとも女人にょにんは悲かなし灌仏かんぶつ会え

昭和二四年作

「興福寺」の灌仏会。誕生仏の背後にいます仏母の心に浸っている。『紅絲』後記にあるように、当時は、母親として、子供たちの遭遇した悲しみを子と一体となって背負い、女人のもつ悲しみをひしと感じていた頃であった。

百^{ひやく}姓^{しやう}の不^ふ機^き嫌^{げん}にしして桃^{もも}咲^さけり

昭和二四年作

へ——食糧不足時代、私達にとってお百姓さんの不機嫌な顔ほど恐しいものはなく——と自句自解。奈良の田原本や疋田村辺りに出かけて米を分けてもらった。桃畑で交渉の母、お米は友禅の反ものや帯と交換した。

起^{おこ}りたる桜^{さくら}吹^ふ雪^{ぶき}のとどまらず

昭和二四年作

花の嵐と落花との嵌合が美しく、「とどまらず」に多佳子の思いがこめられている。色紙にこの句をよく書いていた。斜めに散らした筆蹟が花びらのように見える。

蘇^す 枋^{おう} の 紅^{べに} 昶^{ひかげ} る 齡^{よわい} 同^{おな} じ う す

昭和二四年作

「中村汀女さんに初めてお逢ひする」前書。上京の折、汀女さんのお宅をお訪ねした。共に昭和七年、杉田久女の『花衣』創刊に参加、同九年汀女は「ホトトギス」同人に、多佳子は「馬酔木」を経て昭和二十三年「天狼」同人となり同世代の女流として活躍。

どこまでも 風蝶^{かざ} 一^{ちよう}路^{いち} 会^あひにゆく

昭和二四年作

「石田波郷氏を東京郊外清瀬病院に見舞ふ、手術後にてその瞳に会ひしのみ」前書。波郷は昭和二十一年、帰郷される途次、奈良菅原の家に多佳子を訪ねられたことがある。

しやぼん玉窓なき厦の壁のぼる

昭和二四年作

上京して孫たちとしやぼん玉を吹いてあそんだ折の光景。都会のメカニックなかわきの中で捉えたしゃんぼん玉。

松高き限りを凌霄咲きのぼる

昭和二四年作

『杉田久女句集』出版とききて嬉しさに堪へず 一句「前書。唐招提寺で見た凌霄かずら。遺された往復書信から久女句集の出版を以前から願っていたことを知った。」

う つむき てる は 髪切虫 と 遊ぶ

昭和二四年作

蟻地獄を教えてあげた少年が崖から髪切虫をとってきてくれた。日が暮れて少年が帰ったあとも、ひとりで髪切虫とあそび観察している多佳子の自画像。

乳 母 車 夏 の 怒 濤 に よ こ む き に

昭和二四年作

小田原の御幸が浜。娘（三女）の家は防風松を隔ててすぐ前が海岸なので乳母車に孫を載せて浜まで散歩。つい娘と話が夢中になり気がつくと晩夏の濤砕ける長汀にぼんと押ししてきた形のままに乳母車がおきざりに。私も同伴。

ゆくもまたかへるも 祇園ぎおん囃子ばやしの中なか

昭和二四年作

〔コンチキチン、コンコンチキチ、コンコンコンチキチ〕と鳴る祇園囃子の鉦をきくと、「ゆくもかへるも」ただお祭の中に吾在りといふ楽しさになります。人も吾も善人だけの世がつかられ、一生お祭の日がつづいたらと思ひます——自句自解より。

祭まつり 笛ふえ 吹ふ くと き 男おとこ 佳よ かり ける

昭和二四年作

「戦後はじめて京都祇園祭を観る」前書。京都烏丸に住む秋庭氏の案内で七月十七日の盛夏、薄物に日傘を挿して出かけた。絢爛な鉦もよいが、へ横笛を吹きつづける祭の男ほどよいものはありません」と自句自解している。

八^は方^{ほう}へゆきたし青^あ田^おの中^{なか}に立^たつ

昭和二四年作

青田のただ中に身を置いている。どちらを向いても真青な田が
 拡がっているのである。自由自在。

生^いき堪^たへて身^みに沁^しむばかり藍^{あい}浴^ゆ衣^{かた}

昭和二四年作

藍浴衣の多佳子を詠まれたと思われる句に、

女身沁み出づる浴衣の藍地より 誓子

考ふる胸もと暗き藍浴衣 同

がある。(昭和二十九年、淡路洲本の朝倉家にて)。

あさがほが紺折りたたむひらく前まえ

昭和二四年作

奈良の新薬師寺の近く、朝顔が塀を溢れて咲き、その紺色がありまじり美しいので、見知らぬその家を訪ねて種を乞い早速庭に播いた。名はアメリカ朝顔というらしく強くて沢山の花を毎年見事に咲かせてくれた。

仏足ぶつそくに一本いっぽんの曼珠沙華まんじゆしゃげを横よこたふ

昭和二四年作

「唐招提寺金堂に首なき美しい仏像あり」前書。寺苑の曼珠沙華を折って供華とした。ゆたかな隆起をもった肉づきに衣の襞の流動美がよく似合う如来立像。ここではその「仏足」だけをとりあげている。

いそがざるものありや牡丹ぼたんに雨あめかかる

昭和二四年作

木曾の旅で見た牡丹を回想。旅の刻、人生の刻が二重うつしになつている。「いそがざるものありや」の問いかけが全身的。

霧きり月づく夜よ美うつくしくして一夜ひとよざり

昭和二四年作

奈良の春日野あたり。

僧^{そう}恋^こうて僧^{そう}の憎^{にく}しや額^{がく}の花^{はな}

昭和二四年作

額の花は好きな花の一つ。多佳子は僧に向つてよく質問をし自分の心の糧とした。「妖は徳に如かず」と記した南禪寺の和尚さんの返書が手許にあるがこれも多佳子の質問に応えられたものである。

曼^{まん}珠^{じゆ}沙^{しゃ}華^げからむ薬^{しよ}より指^{ゆび}をぬく

昭和二四年作

『海燕』のへ曼珠沙華咲くとつぶやきひとり堪ゆへをはじめとして忌日を前に咲くこの燃えるように烈しい花が好きで生涯詠みつづけた。長い反った薬にいつしか絡んだ指をそつと抜こうとしている。多佳子は指に表情のあるひとだった。

泣なきしあとわが白息しらいきの豊ゆたかなる

昭和二四年作

へ許したししづかに静かに白息吐くへは感情を懸命に殺している
多佳子。掲出の白息には素直に吾をとりもどした作者がいる。
純粹すぎて世間を知らず憤りに出あうこともあつたようだ。

枯かれはてて遊あそぶ狐きつねをかくなき

昭和二四年作

「裏山に狐が出て、我雞舎を襲ふことあり」前書。雞舎の戸が開
けっ放しになり雞の血痕が裏山へ点々と残っていた。しかし現
実と多佳子の狐は遠くかけ離れメルヘンの世界にいる。

鬘かみ粟しひらく髪かみの先さきまで寂さびしきとき

昭和二四年作

奈良俳句会での作。へ——上五に据える言葉がみつからず迷っていた時はつと真紅のけしの花が浮びました。「鬘粟ひらく」で「髪」先まで寂しきとき」が、ぐつと支へられたやうに思へて嬉しかったことを思ひ出します。当夜の句会で三鬼、静塔、暮石三氏採る。

あぢさゝるやきのふの手紙てがみはや古ふるぶ

昭和二四年作

へ——なつかしい手紙、愉しい手紙、はては腹立たしい手紙さへ、けふがきのふともなれば、「はや古ぶ」のあわれさがあるものです。／略。それは又、人間感情の動いてやまぬうつろひのあわれさとも言へませう——自句自解より。

秋あき風かぜに箏ことうをよこたふ戦いくさ経へて

昭和二五年作

「祖父の琴今はなし」と句帳に前書している。祖父山谷清風は、山田流箏曲の検校で、多佳子は六歳から琴を習った。橋本に嫁いだから琴を弾く姿を見たのは帝塚山で夫亡き後であったと思う。長女と二台琴を並べて手を取り教えていた日もあった。

母ははと子この間あい白しら露つゆの幾いく千せん万まん

昭和二五年作

「淳子、三野明彦と結婚」前書。「天狼」誌上で「母と子の間」というテーマを与えられて文と句を掲載（山口誓子編集）。『紅絲』に幾度か出てきた洋子・博の幸せを祈る祖母の心が背後にある。

いまありし日^ひを風花^{かざはな}の^{なか}中に探^{さが}す

昭和二五年作

風花の中で今の今まで見えていた太陽がふっと姿を消してしまつたその一瞬のとまどい。句帳にはへ夫なきかな風花に日のありかもとめゝとある。

何^{なに}をか待^まつ雪^{ゆき}着^つきはじむ松^{まつ}の幹^{みき}

昭和二五年作

「事ありて」前書。自然はありのままの姿を刻々と見せる。多佳子の部屋からは赤松林が眼の前、雪が降りはじめると紅をおびた幹に雪が張りつき端から真白にしてゆく。

羽子はねの音ねつよし竹たけのさわげる風かぜの中なか

昭和二五年作

元日はたいてい昔原の家で家族と祝いくつろいでいる。外で歯切れのよい羽子の音がすると、この時とばかり出ていつて眺めている。竹林の風の騒ぎが羽子打つ音をいつそう鮮明に伝えている。

夫ふう婦ふして耕こう土どの色いろをか変かへてゆゆく

昭和二五年作

「駿二、啓子代々木に新居を構へる」前書。代々木のあたりはまだ焼跡が残っていて、瓦礫のまじる土を耕し夫婦は庭に花の種を播いて寄宿の多佳子を喜ばせた。

雀すずめの巢すかの紅あか絲いとをまじへをらん

昭和二五年作

「遠く鼓ヶ浦を想ふ 一句」前書。句集『紅絲』の名は山口誓子先生によつてこの句から選ばれた。雀の巢作りの頃、鼓ヶ浦で見た紅絲を想起しての作。誓子句集『遠星』のへ句を見ねば君の遠さよ秋の風に應えているような一筋の心の糸を感じる。

白はく桃とうに入いれし刃は先さきの種たねを割わる

昭和二五年作

丁寧に包まれた薄紙をひらくと、まことに豊かで気品のある水蜜桃から香がたちこめた。岡山からの到来もの。そんな白桃にあらたまつた気持で刃を入れたのだろう。刃先に多佳子の神経が通っている。

一 ひとところくらしきをくぐる踊おどりの輪わ

昭和二五年作

戦後、奈良の盆踊りにはいつも出かけ、時には招かれて審査役などもつとめた。見たままを捉えながら盆踊りの本意に触れている。暗きところはまた明るさに続く。

雞けい頭とう起おきる野の分わきの地ちより艶えん然ぜんと

昭和二五年作

へ臥す日多し養生せよ」と句帳に記している。病臥の角度で野分の雞頭を見ている。雞頭の種を盗んで畑に播いたのは私、それが冠の大きな厚い雞頭となって育った。

椎しいの実みの見みえざれど竿さおうてば落おつ

昭和二五年作

奈良の春日神社の裏あたりか海竜王寺か、木の茂りに隠れてぎつしりなっている椎の実みは肉眼では見えない。竿さおうてば忽ち応えてばらばらと降くだってくる。

梳くしけずりゐて雪せつ嶺れいの照てる曇くもる

昭和二五年作

「松村泰枝さんの許にて」前書。金沢の武家屋敷に住む松村さんは清少納言を思わせるような才女。旅に一夜の宿をかり氣の合う女友達の許で髪を梳くしく。

藤房の隙間だらけに入日時

昭和二五年作

わが家の崖の西肩に野性の藤が数多の房を垂らし、急崖だが多佳子もそこまで上って眺めたこともある。没日の頃は藤房のかたまりから西日がだだもれに洩れていた。

若さかくさず冬帽に雨の粒ふえゆく

昭和二五年作

金沢へ講演旅行に出られる西東三鬼、右城暮石両氏に蹤いて旅。「沢木欣一氏を訪ふ、細見綾子さん丹波にて逢へず」前書。その後菅原の家に欣一・綾子夫妻が立ち寄って下さった時は多佳子が留守であった。

はたはた飛ぶ地を離るるは愉しからむ

昭和二五年作

裏山が拓かれゴルフ場が出来る。朝、まだ誰もいないゴルフ場を歩いていた時、はたはたが驚いて飛びたった。その一瞬、薄羽を陽にかがやかせて楽しげだが、またすぐ地にまぎれていった。

人の背をふと恃みたる穂草の野

昭和二五年作

飛火野から高畑へ抜ける辺りは野が次第に低くなっていて、せせらぎもあり穂草がしげっている。ときおり散策のお仲間と作句するところなので、その辺だと思うが、「ふと恃みたる」という気持は女の立場からはうなずける。

脚註者略歴

大正14年12月生。本名柴山美代子。帝塚山学院卒。
山口誓子に師事し、昭和35年「天狼」同人。

同46年「沙羅」同人となる。句集『石階』『巻貝』。俳人協会会員。

社団法人俳人協会刊「脚註名句シリーズⅠ・11 橋本多佳子集 註Ⅱ橋本美代子」(昭和六十年九月二十五日発行)を
底本としました。

本文庫の発行にあたっては、社団法人俳人協会様ならびに
橋本美代子様のご理解とご承諾をいただきました。厚く御
礼申し上げます。

北九州市立文学館文庫(5)

平成22年4月15日発行

著者 橋本多佳子

脚註者 橋本美代子

発行 北九州市立文学館

〒803-0813 北九州市小倉北区城内4-1

Tel (093)571-1505

Fax (093)571-1525

印刷 株式会社ゼンリンプリンテックス

北九州市立文学館文庫 ⑤



Kitakyushu
Literature Museum